

子ども多文化交流事業

kruco × kruco

活動報告 2019



日本語能力を問わず得意なこと・好きなことで社会貢献する

「外国人の活躍促進」の機会をつくる

What is SCC?

Mission

ミッション

多様な文化や価値観に出会う活動を通して、「違い」を良さと受け止める子どもを育てる

To raise children who understand that each individual is unique and recognize our differences through multicultural, diversity and inclusion activities.

Vision

ビジョン

相手の文化を尊重し、違いを受容する地域・社会

We create a community and society that celebrates diversity based on mutual respect.

Value

バリュー

多国籍の親自身が企画運営することで、彼らに役割感・所属感・自己表現感が芽生え、彼らの子供のアイデンティティにも良い影響を与える

Organized and implemented by the parents from all corners of the world, the values of this project will be:

• Empowerment • Community engagement • Self-expression
and all of these will have a positive impact on their children's identity or cultural roots.

私たちが解決したい社会課題

日本語能力による
情報格差

母国で培った
キャリアの維持が
困難

孤独な育児

文化的な違いによる
ストレス

Unleashing the POWER of DIVERSITY

外国につながる人たちが
それぞれの個性と潜在能力を地域で発揮し合う



多言語での
子育て情報支援事業

多文化交流事業

多文化共生
促進事業

外国にルーツを持つ母親として 地域の子どもたちに母国の文化を伝えるとは



Rujida Kuga 久我ルジダー

こんにちは。私は、久我ルジダーです。通称、イブと呼ばれています。日本に来て14年、日本人の夫とタイにつながる10歳の息子と8歳の娘と暮らしています。私は、横浜市立小学校で英語を話しながら日本の子どもたちにタイの文化を伝える国際理解教育の講師を8年間しています。私は、教えることが生きがいです。何よりもタイ人として誇りを持ち、母国の文化を世界の人たちと分かち合うことが大好きです。SCC (Sharing Caring Culture) も私と同じように世界の文化を共に共有することを目標にしている団体です。この子ども多文化交流事業kruco×krucoの活動も多様な文化的な背景を持った子どもたちの文化交流を促すことを目的としていて、私の思いに添えるものです。



母親として、私が我が子に望むことは、広い視野を持ち、タイや日本以外の国の文化を理解する子であってほしいということです。私たちは、異なる文化が多様に存在しながら同じ地球に住んでいます。お互いに違いを理解し合うことで、カルチャーショックは起こらなくなるでしょう。エスペラント語で「交わる」を意味するkruco。私たちは、教育的な活動を通して、国や文化を超えて交わること、「交わり合う場」を意図して、kruco×krucoと命名しました。子ども多文化交流事業kruco×krucoに参加することで、子どもたちは、まっさらの気持ちで母国の文化とは異なる文化を知り、楽しみながら多様な文化への世界が開かれていくでしょう。

母語と母文化維持のために

イブは、当法人が任意団体を立ち上げた2014年に長女のレンちゃん子連れで多文化親子交流会に参加したのをきっかけに活動に徐々に関わるようになり、得意な料理を活かし、大人や子ども向けにタイ料理を英語で教える講座をこれまでに5回開催。また、料理だけでなく、多言語のおはなし会では、インソップ寓話の「ありとぎりぎりす」をタイ語で読み、読み手を務めました。聞き慣れないタイ語を聞いて、果たして子どもたちが興味を示すのかという不安がありましたが、ジェスチャーと歌を交えながら、ありとぎりりすの性格の違いを表現し、子どもたちを巻き込みながら、読み聞かせをしていました。



こうした講師としての活動をする傍ら、外国につながる子どもの母語教育に関心があり、タイにつながる子どもを育てる母親として、2019年9月にタイ語の学習支援や母文化を伝えるグループを立ち上げました。日頃、タイ語にふれる機会が少ない日本生まれのタイにつながる子どもたちを集めて、親のルーツであるタイ語やタイの文化を伝える活動をしています。毎回、活動日には、その日の日直がタイの国歌を掲げて、全員で歌うところから始めるほか、タイ語での挨拶の仕方まで丁寧に指導。手で合掌しながら、相手が年長者ならば深く頭を下げてと、自分がタイで親から教えてもらったように、子どもたちに丁寧に教えています。

タイ料理 親子オンラインクッキング [2020.7.25]

コロナ禍で初のオンラインでの親子クッキングを実施。タイのパイナップルチャーハンを作りました。ジャスミンライス、ナムプラーなど特有の材料をレシピとともに郵送し、当日はオンライン会議ツールを使い、講師の説明を聞きながら各家庭で調理しました。ライブ配信会場は有限会社グランジャポンの会場を使用させていただきました。



多国籍親子クッキング 都筑民家園でおにぎりづくり



日 時 | 2019年10月20日(日) 10:30~12:30
場 所 | 都筑民家園(横浜市都筑区大瀬西2番)
参加者 | 外国につながる児童4名
(ドイツ2名、中国2名)
日本人児童6名



都筑区で子どもの食育教育に取り組むNPO法人H&Kの日本人講師の協力によって、英語と日本語でおにぎりづくりをしました。都筑民家園内の釜でご飯を炊き、地元の小松菜を使った簡単な副菜の作り方も紹介していただきました。お米が炊き上がるのを待つ間には、日本の昔遊びとしてお手玉で遊んだり、「さるかに合戦」の紙芝居を英語と日本語で読んでみました。会の最後には、水拭き雑巾で床拭きをして、日本ならではの掃除を体験。特に外国につながる児童は、初めての体験に喜んで雑巾掛けをしていました。日本に住み始めたばかりのドイツ人の母親は、「子どもに日本文化に親しむ時間を持たせたかったので、貴重な体験ができて良かった」と話し、中国人の母親は、「日本生まれの息子とおにぎりをつくってみたかった」と参加の動機を語っていました。



多国籍親子クッキング 親子でマレーシア料理づくり



日 時 | 2020年2月8日(日) 10:00~12:30
場 所 | JA横浜クッキングスタジオ
(横浜市都筑区中川中央1丁目26-6)
参加者 | 外国につながる児童4名(ドイツ3名、マレーシア1名)
日本人児童5名

マレーシアの国民食と呼ばれるナシ・レマクを親子で作る英語での親子クッキングを開催。講師を務めたメイは、中国系マレーシア人で、世界地図を広げて、マレーシアの場所や国旗、飛行機で何時間かかるかなど、地理的な話をするとともに、同じ一つの国でも多様な民族が住んでいるマレーシアの文化について、子どもたちに分かりやすく説明しました。ナシ・レマク

は、特製のソースをつけて食べるということで、大人は主にソースづくりをし、子どもたちは、きゅうりを切ったり、ゆで卵の皮をむいたりしました。また、最後に子どもたちは、個々に盛り付けを楽しみました。会食時には、JA横浜のスタッフの方々が横浜市内の農産物について、地図や動画で紹介してくださったり、子どもたちへのお土産のノートまでプレゼントしていただいたり、地域の企業の協力によって、大変充実した内容になりました。



2019.10

2020.1

1.18 「春節ってなあに？」

7.4 多言語おはなし会「英語、タイ語、スペイン語で読み聞かせ」

9.20 「盆栽をつくろう」

7.25 オンラインクッキング「パイナップルチャーハンをつくろう」

9.26 「Explore India! インドの文化体験」

世界の行事 タイ「ロイクラトン祭」



タイでは、毎年旧暦12月(現在の10月または11月)に「ロイクラトン」という水の祭典を行うことから、都筑区内の商業施設、港北みなも3階のオープンスペースにて、子どもたちにロイクラトン祭りを紹介する世界の行事イベントを行いました。

「ロイクラトン」とは、灯籠(クラトン)を川に流す(ロイ)というタイの人々の間で古くから続く風習で、バナナの幹や葉などで作った灯籠の上にロウソクと線香を立てて、川に流したのが始まりとのことから、子どもたちとクラトンを作り、

水の神様への感謝の気持ちを捧げました。また、タイ出身のお母さん有志の協力により、クラトンづくりのほかに、タイの楽器に親しんだり、タイのダンスを披露してもらったり、タイ文化に浸る一日となりました。

日 時 | 2019年11月2日(土) 10:30~12:30
場 所 | 港北みなも(横浜市都筑区中川中央2丁目7番1)
参加者 | 外国につながる児童15名
(タイ14名、インドネシア1名)
日本人児童4名



多言語おはなし会 インド・中国・インドネシアのおはなし



英語、中国語、インドネシア語でそれぞれの国の絵本の読み聞かせを行いました。1冊目は、東洋、西洋のスパイスをテーマとした「Asian Spice Kids」をインド人の読み手が英語で読み、実際のスパイスの匂いを子どもたちに嗅がせたり、スパイスを登場人物に見立てて、セリフや動きを子どもたちと再現したり、双方向の読み聞かせを行いました。2冊目は、インドネシアの「Krauk! Krauk!」というパン喰い競争ならぬ、煎餅競争の話インドネシア人の読み手がインドネシア語と英語で行いました。絵本の場面と同じように煎餅競争を参加者の子どもたちと行い、大盛り上がりしました。最後の3冊目は、パパイヤの種を食べてしまった豚が、お腹の中で種が発芽し、木が生えてしまうのではないかと心配する話で中国語で読み聞かせをしました。パネルシアター形式で部屋を暗くして、懐中電灯で明かりを灯しながら、楽しみました。

日 時 | 2020年2月15日(日) 10:30~11:45
場 所 | つづきMYプラザ(横浜市都筑区中川中央1-25-1)
参加者 | 外国につながる児童9名
(タイ9名)
日本人児童2名



インド文化体験イベントに参加して

Edward Dons エドワード・ドンス 

僕は、9月のインド文化体験イベントを楽しみました。たくさん子どもたちと一緒にインド文化のことを知ることができて楽しかったです。

最初に世界地図を見て、インドを探しました。講師のアキラ モハンダスは、子どもたちの額にビンディをつけてくれました。ビンディは、色がついたパウダー状のもので、額につけます。その後、いろいろな香辛料の匂いを嗅がせてくれました。とても辛いスパイスもちょっとだけ味見しました。それから、アキラは、サリーという色鮮やかなインドのドレスを見せてくれました。サリーの長さは、6メートル近いそうです。彼女は、一枚のサリーで僕たちの体を巻き込んで、包んでしまいました。最後にアキラは、ヒンディー語で僕の名前を書いてくれて、それを家へ持って帰りました。みんな最後に写真も撮りました。

とても楽しい時間でした。もっとインドのことを知りたかったと思いました。



感性豊かな子どもだからこそ気づく「違い」と「同じ」

インド文化体験では、アキラが子どもたちをインドの旅へと誘うという設定で様々なシーンに分けて、インドの文化や風習を体験。インドの人たちは、自宅に人を招いた時に、お香を炊くということで、アキラがお皿に乗せたお香の前で手を合わせて挨拶しました。また、ビンディについても紹介。イギリス出身の父親を持つ7歳の女の子(エドワードの妹)は、自分から前へ出て、額にビンディをつけてもらっていました。続いて、日本のカレーライスと

インドのカレーの写真を見せて、「違い」を考えました。「日本のカレーライスには、じゃがいも、人参、玉ねぎ、お肉が入っているけど、インドのカレーには入っていない」など、子どもたちは、気づいたことを発表していきました。インドのカレーはスパイスでできていると知った子どもたちは、講師に促されながら、スパイスの入った瓶を一つずつ開けて、匂いを嗅ぎ、参加者の一人で、父親がイスラエル出身の11歳の男の子は、「僕のお父さんは、シナモンでチャイを作ってくれるよ。」と話していました。食について学んだ後は、浴衣を着たサポーターとの違いを見せながら、インドのサリーを紹介。一枚の布がこんなにも長いことを実際のサリーを子どもたちの体に巻きつけながら体感してもらいました。そして、最後にインドのお祭りを紹介。ホーリー祭というカラーパウダー(色粉)を付け合うヒンズー教のお祭りを体験しました。最初は、恐る恐る手につけたりしていた子どもたちも、一人が髪の毛につけると、面白い!ということで、色とりどりのパウダーを付け合うように。その様子を見て、「インドのお祭りさながら」と講師も想像以上の子どもたちの反応を喜んでいました。また、インドでは、装飾や魔除として、ヘナタトゥーをすることも紹介。アキラは、ビニール手袋をはめた子どもの手の上に、ヘナアートを見せていきました。一通りの体験を終えた後で、アキラは参加者の子どもたちの名前をホワイトボードにヒンディー語で書いていきました。子どもたちは、アルファベットではない文字の形に引きつけられ、自分の名前がいつもとは違う形で表現されることを楽しんでいました。最後にイベントのふりかえりでシートに記入したところ、イスラエル人の父を持つ子どもは、「インドにもイスラエルにもヘナがあると気づいた」と自分のルーツに触れた感想を綴っていて、外国につながる子どもたちがルーツを感じとる機会につながったことに本事業の意義を感じました。



インド人講師 アキラ モハンダスの想い

講師を務めたアキラは、昨年、インド人の夫の赴任に伴い、南インドから日本に住み始めたばかりです。母国では、理系の大学で学び、教育コンテンツをつくる仕事をしていました。5歳児の男の子を育てているママで、日本での子育ては、わからないことばかりで不安は尽きないと言います。SCCと出会ってから、次から次へとアイデアが湧いてきて、子どもたちとこんなことをしてみたいと思うようになり、日本語が話せなくても、スキルを発揮できることがうれしいと話しています。



activity report

活動報告

子ども多文化交流事業は、相手の文化を尊重し、違いを受容する地域づくりを目指して、外国につながる子どもと日本人の子どもが多様な文化や人と出会うきっかけをつくり、地域の多文化交流を促進することを目的として、2019年10月に始動したプロジェクトです。

学習ではなく、子どもたちが楽しみながら参加できることを重視し、各国の料理や行事体験、多言語の読み聞かせの活動を通して、子どもたちの「楽しい」、「もっと知りたい」という気持ちを喚起しながら、子どもの国際感覚、人権感覚を育むとともに、自分のルーツや母文化に興味や愛着を持てるようにしたいと願って活動を始めました。

講師業務及び、運営・サポートについても、当事者の外国人家族が好意的に関わってくれたこともあり、今年度は、3月以降コロナ禍により開催に制限がある中でも、9回実施することができました。また、親子クッキングについては、オンラインで実施するなど、初めての試みでしたが、入念な準備と講師との連携により、少ないリソースでも効果的に運営できることを知り、大変良い機会となりました。

参加人数(年9回実施)	延103名 / 外国につながる児童 65名 日本人児童 38名
参加した子どもたちとつながる国	インド、タイ、マレーシア、インドネシア、ドイツ、イギリス、カナダ、イスラエル、キルギス、香港、日本、中国
講師の出身国	インド、タイ、マレーシア、インドネシア、コスタリカ、日本、中国

Sponsorship and Cooperation

後援・協力

本事業の実施に際しまして、助成金を授与してくださったNPO法人モバイルコミュニケーションファンド様はじめ、ご後援いただきました都筑区地域振興課の皆さま、また、協力企業としてご一緒してくださった皆さまに心から御礼申し上げます。

NPO法人モバイルコミュニケーションファンド/ JA横浜 / 都筑区役所 / 都筑民家園 / みなも港北 / 有限会社グランジャポン (50音順)

イベントの企画立案・運営をサポートします

本事業の実施を機に、地域の保育園、図書館等から子ども向けに多文化理解を促進するプログラムの企画立案や講師のコーディネート、イベント当日の進行などの依頼を受けることが増えました。希望の国、言語や事業費については、応相談にて承りますので、ご検討の場合は、下記の連絡先までお問い合わせください。

Get in Touch
連絡先

メール info.sccjapan@gmail.com | ウェブサイト <https://sharingcaringculture.org/>